

松葉園遺跡3・石勺遺跡9

大野城市文化財調査報告書 第196集

大野城市教育委員会

松葉園遺跡3

—第4次調査—

石勺遺跡9

—P地点の調査—

大野城市文化財調査報告書 第196集

2022

大野城市教育委員会



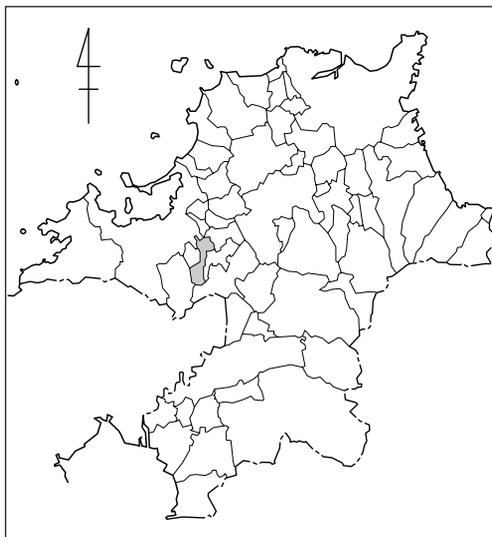
まつ ば ぞの
松葉園遺跡 3

— 第 4 次調査 —

こく じゃく
石 勺 遺 跡 9

— P 地点の調査 —

大野城市文化財調査報告書 第196集



序

福岡県大野城市は福岡平野の東南部に位置し、その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来します。市域は中央部がくびれ、南北に細長い形をしていますが、東部に大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡と、それぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財を擁する歴史豊かな街です。

本書で報告するのは、2件の個人の住宅建築に伴う調査の成果で、いずれも調査面積は小規模でしたが、それぞれ成果を上げています。

松葉園遺跡は乙金山の山麓に位置する遺跡で、これまで3次にわたる調査を実施し、本市では希少な弥生時代を中心とした遺跡であることが分かってきています。今回の4次調査は遺跡の北東側で実施しましたが、溝やピットなど弥生時代の遺構を検出し、遺跡の広がりを確認することができました。

石勺遺跡は、御笠川と牛頸川の合流する地点の牛頸川左岸の小高い場所に営まれた遺跡で、縄文時代から中近世に及ぶ遺構が数多く見つかри、市内でも有数の大きな遺跡です。これまで15地点で調査を行ってきましたが、弥生時代の墓地、古墳時代の集落、奈良時代の火葬墓など貴重な発見がありました。今回は16地点目の調査になりますが、個人住宅の建設に伴う調査の為、狭い範囲の調査ではありましたが、弥生時代の遺構が見つかっており、遺跡の内容を補充する成果が上がりました。

本書はその成果をまとめたものですが、本書が学術研究はもとより、広く一般に周知され、考古学の深化や地域史の解明等に活用され、文化財愛護の精神を醸成する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査および報告書作成・刊行にあたり、ご理解ご協力いただいた地権者の皆様をはじめ、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、松葉園遺跡第4次調査、石勺遺跡P地点調査を併せた発掘調査報告書である。
2. 調査はいずれも個人住宅建築に伴う事前の発掘調査として実施したもので、大野城市教育委員会が調査主体となり、国庫補助事業として実施した。
3. 発掘調査は松葉園遺跡第4次調査（2012年度）を早瀬 賢が、石勺遺跡P地点調査（2020年度）を木原 堯がそれぞれ担当した。
4. 本書に使用する実測図は、遺構を各調査担当者が作成し、木原が製図した。遺物実測図の作成及び製図は以下のとおりである。
 - ・松葉園遺跡4次；（実測）小畑貴子、（製図）小嶋のり子
 - ・石勺遺跡P地点；（実測）古賀栄子、（製図）小嶋
5. 本書で使用する写真は遺構写真を各担当者が撮影したものを、遺物写真は写測エンジニアリング㈱に委託し、牛嶋 茂が撮影したものをそれぞれ使用した。
6. 本書の遺構平面図中の方位は、座標北を表し、座標は国土座標系（第Ⅱ系）を使用している。
7. 本書の遺跡分布図は国土地理院発行の25000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣の遺跡包蔵地分布図を参考に作成した。
8. 本書の執筆は木原、澤田康夫が行い、編集は澤田が行った。
9. 本書掲載の遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会で保管している。

目 次

I. はじめに	1
II. 周辺の遺跡分布と歴史的環境	2
III. 松葉園遺跡第4次調査	
1. はじめに	7
2. 調査の成果	8
(1) 調査の概要	8
(2) 遺構と遺物	8
3. まとめ	9
IV. 石勺P地点調査	
1. はじめに	11
2. 調査の成果	12
(1) 調査概要	12
(2) 遺構と遺物	13
3. まとめ	18

図 版 目 次

図版1	松葉園第4次調査全景、畝状跡
図版2	松葉園第4次調査前、SD01、SP01、SP02
図版3	石勺P地点全景、SK01全景
図版4	石勺P地点 北東部ピット、北西部ピット、調査区南半
図版5	松葉園第4次出土遺物、石勺P地点出土遺物
図版6	石勺P地点出土遺物

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3～4
第2図	松葉園遺跡調査地位置図	7
第3図	第4次調査遺構配置図	8
第4図	第4次調査出土遺物実測図	9
第5図	石勺遺跡調査地位置図	11
第6図	P地点遺構配置図	12
第7図	SK01実測図	13
第8図	SK01出土遺物実測図	13
第9図	ピット群出土遺物実測図	14
第10図	包含層出土遺物実測図①	15
第11図	包含層出土遺物実測図②	16

表 目 次

第1表	松葉園遺跡4次調査出土土器観察表	19
第2表	石勺遺跡P地点調査出土土器観察表	19

I. はじめに

1. 調査の組織

本書所収の発掘調査（平成24・令和2年度）及び整理作業（令和3年度）にかかる調査体制は以下のとおりである。

平成24年度（松葉園4次現場調査）

教育長	吉富 修
教育部長	藤島 正明
ふるさと文化財課長	鐘ヶ江義則
係長	徳本 洋一、平田 哲也
主査	石木 秀啓
主任技師	林 潤也、早瀬 賢（調査担当）、上田 龍児
技師	齋藤 友紀

令和2年度（石勺P地点現場調査）

教育長	吉富 修
教育部長	日野 和弘
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	林 潤也、上田 龍児、佐藤 智郁（～4月）
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
技師	山元 瞭平、齋藤 明日香
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫、木原 堯（調査担当）
（庶務）	西村 友美、三好 りさ

令和3年度（整理作業）

教育長	吉富 修（～6月）、伊藤 啓二
教育部長	日野 和弘
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	林 潤也、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ、光原 乃理子
会計年度任用職員（整理作業）	小畑 貴子、小嶋 のり子、古賀 栄子、白井 典子 篠田 千恵子、津田 りえ、仲村 美幸、氷室 優、松本 友里江

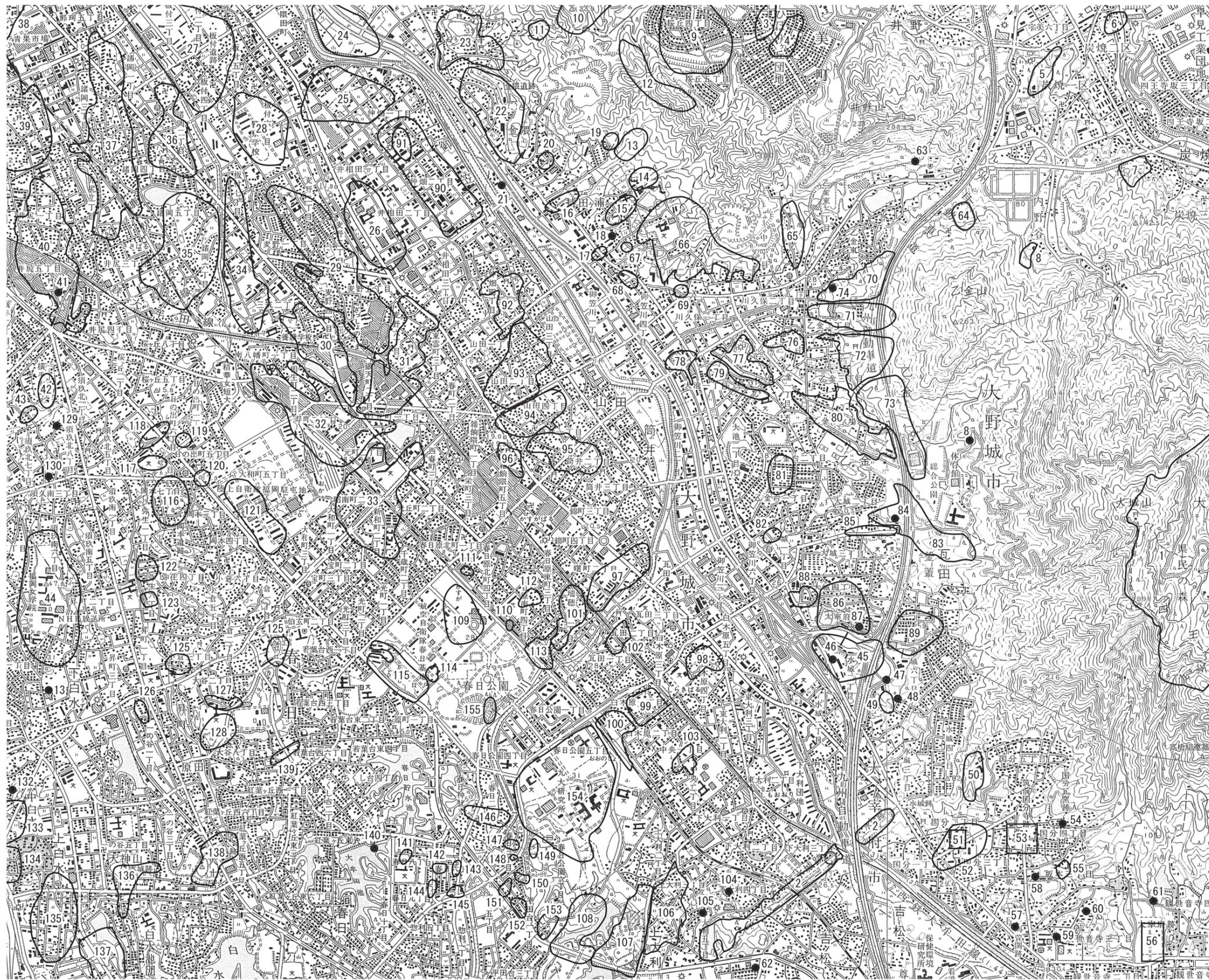
II. 周辺の遺跡分布と歴史的環境

大野城市は南北に細長く、中央部がくびれる鼓形をしており、北東部には四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山山塊とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれる中央部は御笠川による沖積地及び氾濫原の低地をなしている。南部の牛頸山は脊振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。この牛頸山から派生する牛頸川は南流し、市役所近くで御笠川と合流するが、この両河川に挟まれた一帯は沖積平野が形成される。松葉園遺跡は乙金山・四王寺山から西へ緩やかに下り、平野との接点の低丘陵上に位置する。石勺遺跡は、牛頸山から北流する牛頸川が御笠川と合流する地点の左岸で、周辺の中小河川により解析が進んだ低丘陵と、御笠川により形成された沖積平野が接する微高地上に立地している。

このような地理的・地質的環境の下で本市では、旧石器時代以降さまざまな歴史が営まれ、痕跡が遺跡として地中に残されてきた。以下通史的にその概略について述べる。

まず、旧石器・縄文時代の遺跡は少ないが、釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など丘陵上の遺跡でナイフ形石器、細石刃などの遺物が出土している。縄文時代になると、草創期の遺構・遺物は確認されていないが、早期では釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、本堂遺跡等の丘陵上や石勺遺跡など沖積平野の微高地にも押型文土器や石鏃が出土している。前・中期になると遺跡は激減し、周辺地域で散見するだけで、本市では遺構が確認されていない。後・晩期になると牛頸塚原遺跡、牛頸日ノ浦遺跡で竪穴住居、土坑が確認されている。この他、村下遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、古野遺跡、善一田遺跡では早期から晩期にかけての遺物が出土している。また、薬師の森遺跡、石勺遺跡では多数の落とし穴遺構が検出されており、丘陵上、沖積平地問わず遺跡が展開している。

弥生時代になると、市域でも遺跡の数は増加する。前期の遺跡は市域の北部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で木棺墓・甕棺墓等の墳墓遺跡が営まれる。市域南部においても牛頸日ノ浦で前期の墳墓遺構がある。集落では御陵遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡で早期～前期の遺構・遺物が出土している他、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など前期末ごろに出現し中期まで継続する遺跡もある。中期になると、平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が中期を通じて継続し、丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で集落が展開し、南部でも本堂遺跡で集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や森園遺跡で中期後半を中心とした甕棺墓群が営まれる。後期になると仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などの他、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡・青銅器鋳型などが出土しており、拠点的な集落となっている。周辺では中期以降春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、所謂、「奴国」の中心的な地域と位置づけられている。



1. 大野城跡
2. 水城跡
3. 岩長浦古墳群
4. 観音浦古墳群
5. 正龍古墳群
6. 湯湧古墳群
7. 花ノ木古墳群
8. 内野谷古墳群
9. 桜ヶ丘古墳群
10. 七曲古墳群
11. 金剛山古墳群
12. 持田ヶ浦古墳群A群
13. 持田ヶ浦古墳群B群
14. 持田ヶ浦古墳群C群
15. 持田ヶ浦古墳群D群
16. 持田ヶ浦古墳群E群
17. 持田ヶ浦古墳群F群
18. 今里不動古墳
19. 堤ヶ浦古墳群
20. 影ヶ浦古墳群
21. 丸山古墳
22. 金隈遺跡群
23. 立花寺遺跡群
24. 立花寺B遺跡群
25. 井相田D遺跡群
26. 井相田C遺跡群
27. 板付遺跡
28. 高畑遺跡
29. 麦野A遺跡
30. 麦野B遺跡
31. 麦野C遺跡
32. 南八幡遺跡群
33. 雑餉隈遺跡群
34. 三筑遺跡
35. 笹原遺跡群
36. 諸岡B遺跡
37. 諸岡A遺跡
38. 比恵・那珂遺跡群
39. 五十川遺跡群
40. 井尻B遺跡
41. 井尻B-1号墳
42. 寺島遺跡
43. 笠按遺跡
44. 弥永原遺跡群
45. 成屋形遺跡群
46. 成屋形古墳群
47. 裏ノ田竊跡
48. 裏ノ田古墳
49. 裏ノ田遺跡
50. 陣の尾遺跡群・古墳群
51. 筑前国分尼寺跡
52. 国分松本遺跡
53. 筑前国分寺跡
54. 国分瓦竊跡
55. 御笠田印出土地
56. 大宰府政庁跡
57. 松倉瓦竊跡
58. 松本瓦竊跡
59. 来木瓦竊跡・古墳群
60. 来木北瓦竊跡
61. 都府楼北瓦竊跡
62. 神ノ前竊跡
63. 唐山遺跡群・古墳群
64. 盗原古墳群
65. 唐山遺跡
66. 御陵遺跡群・古墳群
67. 御陵脇遺跡
68. 塚口遺跡
69. 御陵前ノ縁遺跡
70. 善一田遺跡・古墳群
71. 王城山遺跡・古墳群
72. 古野遺跡・古墳群
73. 原口遺跡・古墳群
74. 乙金竊跡
75. 此岡古墳群
76. 松葉園遺跡
77. 森園遺跡
78. ヒケシマ遺跡
79. 中ノ寺尾遺跡
80. 薬師の森遺跡
81. 銀山遺跡
82. 原門遺跡
83. 雉子ヶ尾遺跡
84. 雉子ヶ尾竊跡
85. 雉子ヶ尾古墳
86. 釜蓋原古墳群
87. 笹原古墳
88. 金山遺跡
89. 釜蓋原遺跡
90. 仲島遺跡
91. 仲島本間尺遺跡
92. 川原遺跡
93. 御笠の森遺跡
94. 宝松遺跡
95. 村下遺跡
96. 雑餉隈遺跡
97. 石勺遺跡
98. 原ノ畑遺跡
99. 後原遺跡
100. 御供田遺跡
101. 瑞穂遺跡
102. 国分田遺跡
103. ハザコ遺跡
104. 谷川遺跡
105. 出口遺跡・竊跡
106. 上園遺跡
107. 本堂遺跡群
108. 梅頭遺跡・竊跡
109. 駿河A遺跡
110. 駿河B遺跡
111. 駿河D遺跡
112. 駿河E遺跡
113. 原ノ口遺跡
114. 先ノ原B遺跡
115. 立石遺跡
116. 須玖岡本遺跡
117. 須玖坂本B遺跡
118. 須玖五反田遺跡
119. 須玖永田遺跡
120. 須玖尾花町遺跡
121. 上田平・天田遺跡
122. 赤井手遺跡
123. 竹ヶ本遺跡
124. 伯玄社遺跡
125. 大南B遺跡
126. 宮の下遺跡
127. 大南遺跡
128. 大谷遺跡
129. 御陵遺跡群・古墳群
130. 野藤1号墳
131. 下白水大塚古墳
132. 日輝塚古墳
133. 辻田遺跡
134. 門田遺跡
135. 天神の木遺跡
136. 天神山水城跡
137. ウトグチ遺跡群
138. 大土居水城跡
139. 大倉水城跡
140. 大牟田竊跡
141. 惣利竊跡群
142. 惣利遺跡
143. 惣利北遺跡
144. 惣利西遺跡
145. 惣利東遺跡
146. 春日水城跡
147. 向谷北遺跡
148. 向谷西遺跡
149. 向谷遺跡
150. 向谷古墳群
151. 向谷南遺跡
152. 春日平田北遺跡
153. 春日平田遺跡
154. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群
155. 先ノ原・春日公園内遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

古墳時代になると、福岡平野でも前方後円墳が築造され始め、那珂川流域を中心に首長墓級の墳墓が展開する。流域最古級の前方後円墳として、那珂八幡古墳がある。これに後続する盟主墳として、安徳大塚古墳、卯内尺古墳が系譜を追える。市域において首長墓級の前方後円墳は認められないが、御陵古墳群周辺からは三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、古墳時代初期の有力者の存在を窺わせる。この時期の集落遺跡としては仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代の後期から継続し、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡、森園遺跡や本堂遺跡等で集落の形成が認められる。中期になると初期横穴式石室を採用した老司古墳が造られ、流域でも中規模の前方後円墳や円墳が散見される。市域では5世紀前半の30m級の円墳である笹原古墳があり、帆立貝式の成屋形古墳（5世紀後半）とともに御笠川流域の盟主的な勢力の存在を示す。また、この時期には初期の横穴式石室を主体部とする塚原古墳群、古野古墳群等の古式群集墳が営まれるが、遺跡数としては少ない。集落遺跡は石勺遺跡が弥生終末から継続して営まれ、村下遺跡など初期のカマドや朝鮮半島系の軟質土器が出土しており、この他、中・寺尾遺跡、森園遺跡、上園遺跡、仲島遺跡などで散発的に認められる。後期になると、6世紀中頃の東光寺剣塚古墳、日拝塚古墳が造られるが、以降盟主的な前方後円墳は造られなくなる。これに代り6世紀後半以降、平野部に臨む一帯の丘陵部には径10m前後の小円墳を主体とする群集墳が爆発的に増加する。いまだ、小規模な前方後円墳は幾つか造られるが、いずれも群の中に取り込まれる。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が展開する。持田ヶ浦古墳群、善一田古墳群、王城山古墳群等があり、市域南部では須恵器工人たちの墓と考えられる牛頸中通古墳群、後田古墳群、小田浦古墳群などがあり、珍しい例として、梅頭窯跡では須恵器窯を転用した墳墓が見つかっている。これらの群集墳は6世紀後半から7世紀にかけて造営され、8世紀代まで追葬を行うものもある。一方、この時期の集落遺跡は6世紀中頃以降増加する。仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡等が弥生時代から継続して営まれる他、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡等が新たに出現する。乙金山山麓では、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡など、6世紀中頃前後の短期間に小規模な集落が出現するが、中でも、薬師の森遺跡は朝鮮半島系資料が充実し、鉄器生産や須恵器生産などの手工業に関わる住居域が7世紀中頃まで継続する大きな集落として注目される。また、南部の牛頸山山麓では、牛頸須恵器窯跡が6世紀中頃から操業を開始する。上園遺跡は同時期の集落だが、ロクロピットの存在などから、牛頸窯開窯期の須恵器政策工人の集落と考えられている。須恵器生産は乙金窯跡、雉子ヶ尾窯跡、裏ノ田窯跡などが6世紀後半から操業するが、いずれも小規模で、短期間で操業を終える。

飛鳥時代になると、墳墓で注目すべきは福岡市博多区と本市の境にある今里不動古墳で、7世紀前半築造の大型円墳であり、御笠川右岸地域の盟主墳とされる。また、牛頸須恵器窯跡では生産の一つのピークを迎え、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、惣利西遺跡などは須恵器工人の集落と考えられている。一方、野添窯跡や月ノ浦窯跡では初期瓦を生産しており那津官家比定地の一つ那珂遺跡に供給されたことが知られる。7世紀後半になると朝鮮半島で唐が介入する騒乱が起り、東アジア全体が動乱の時代を迎える。日本も白村江の戦いでの大敗を機に史上初の国際的な危機に直面する。これを受けて、664年から665年にかけて、水城・大野城が相次いで建設される。国内でも壬申の乱が起り、これを契機に律令体制が整備され、本格的な中央集権国家が形成され

ていく。

奈良時代になると、律令が整い、九州では大宰府を中心として各地の官衙遺跡と官道を整備するなどして中央集権国家として支配体制が整えられる。仲島遺跡や井相田C遺跡では公的施設と考えられる掘立建物を中心とした遺構が確認されている。また、井相田C遺跡、谷川遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡、池田遺跡などで道路状遺構が確認されている。周辺の高畑遺跡は高畑廃寺あるいは那珂郡衙の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡では大規模な集落が出現し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や寺院、村落が展開した様子が窺える。また、市域では本堂遺跡で村落内寺院と考えられる遺構が確認され、薬師の森遺跡では小規模な集落ではあるが、須恵器窯造営に関する遺構が確認されており須恵器窯の操業があったと考えられる。一方、牛頸須恵器窯跡では大宰府の整備拡充に伴い、窯の数が増加し、牛頸ダム周辺の窯跡群や、小田浦、ハセムシ等の多数の窯跡があり、供膳具を中心に大量生産が行われ活況を呈する。

平安時代前半期は総体的に遺跡が減少傾向にある。牛頸須恵器窯跡は9世紀中頃には操業を停止する。前代にみられた仲島遺跡なども9世紀代には消滅する。墳墓遺構として本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡、薬師の森遺跡で土坑墓が見つかった。平安時代も後半になると律令体制は崩壊し、武士が活躍する時代を迎える。大宰府政庁・鴻臚館の機能は中世都市「博多」に移る。塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡では輸入陶磁器を副葬する土坑墓が見つかっており、本堂遺跡では「大日如来」銘の墨書土器や木製形代などの祭祀に懸る遺物が出土している。集落は塚口遺跡、御笠の森遺跡、上園遺跡、宝松遺跡があり、また、薬師の森遺跡や天神田遺跡、谷川遺跡や上大利小水城周辺遺跡では瓦器の焼成遺構や関連する窯道具が多量に見つかっていて、瓦器生産が盛んに行われたことが窺える。

鎌倉～戦国期では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで当該期の遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12～14世紀の中世墓地が営まれ、溝に囲まれたピット群が広範に広がっており、有力な集団の存在を窺わせる。また、御笠の森遺跡では16～17世紀中頃にかけて多数の方形区画溝が展開し、中世末～近世初頭の集落像を考える上で注目される。この他、市域には戦国期の山城として乙金の唐山城、牛頸の不動城があるが、実態解明には至っていない。

江戸時代では御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、屏風田遺跡等で遺構・遺物が見つかっており、御笠の森遺跡は『筑前国続風土記拾遺』に記載のある山田村の集落移転とその動態が一致し、注目される。また、後原遺跡では25次に及ぶ調査が実施され、集落域や集団墓地、中心的な神社など「拾遺」に記述のある白木原村の一部の景観復元が可能になりつつある。

また、後原遺跡や雑餉隈遺跡、宝松遺跡、大城山遺跡などでは明治期から大戦後にかけての本市固有の近世遺構が発掘調査の俎上に乗る機会が多くなり、大城山遺跡や後原遺跡では防空壕や米軍のベースキャンプ通りの痕跡が見つかるなど、近・現代遺跡の遺構についても本市の特徴的な歴史として、注視していく必要がある。

Ⅲ. 松葉園遺跡第4次調査

1. はじめに

松葉園遺跡は乙金山から西方の御笠川が流れる低地に向かって、いくつも派生した低丘陵あるいは段丘上に立地している。本遺跡と小さな谷を一つ挟んだ南側に並行して細く延びる丘陵先端部には、弥生時代前期から古墳時代にかけて甕棺墓地や住居址群が展開する中・寺尾遺跡が立地する。また、周辺には森園遺跡、ヒケシマ遺跡、塚口遺跡、御陵前ノ椽遺跡など弥生時代・古墳時代の遺跡が集中する。本遺跡は畑の耕作中に偶然石棺が発掘されたのが契機となっているが、これまで2回の調査が実施されている。それによると、旧石器時代から中世にかけての遺構、遺物が確認されており、特に弥生・古墳両時代の遺構・遺物が中心となる遺跡である。

松葉園第4次調査は大野城市乙金1丁目795番9で計画される、個人住宅の建設を事由として実施した調査である。調査は平成24年9月5日から同年10月2日まで実施し、調査面積は83㎡である。調査は国・県の補助を受け大野城市教育委員会が実施した。



第2図 松葉園遺跡第4次調査地位置図 (1/2500)

2. 調査の成果

(1) 調査の概要

松葉園遺跡は乙金山の西麓に御笠川に向かって形成される八つ手状に開析の進んだ低丘陵及びそれから更に延びる段丘上に広がる遺跡である。現在まで弥生・古墳時代を中心に、旧石器時代から中・近世にかけての遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、遺跡の北辺中央部に近い地点で実施したが、現状は畑として利用されている。地盤は砂質・シルトで、北側に接する道路より一段高くなっていた。

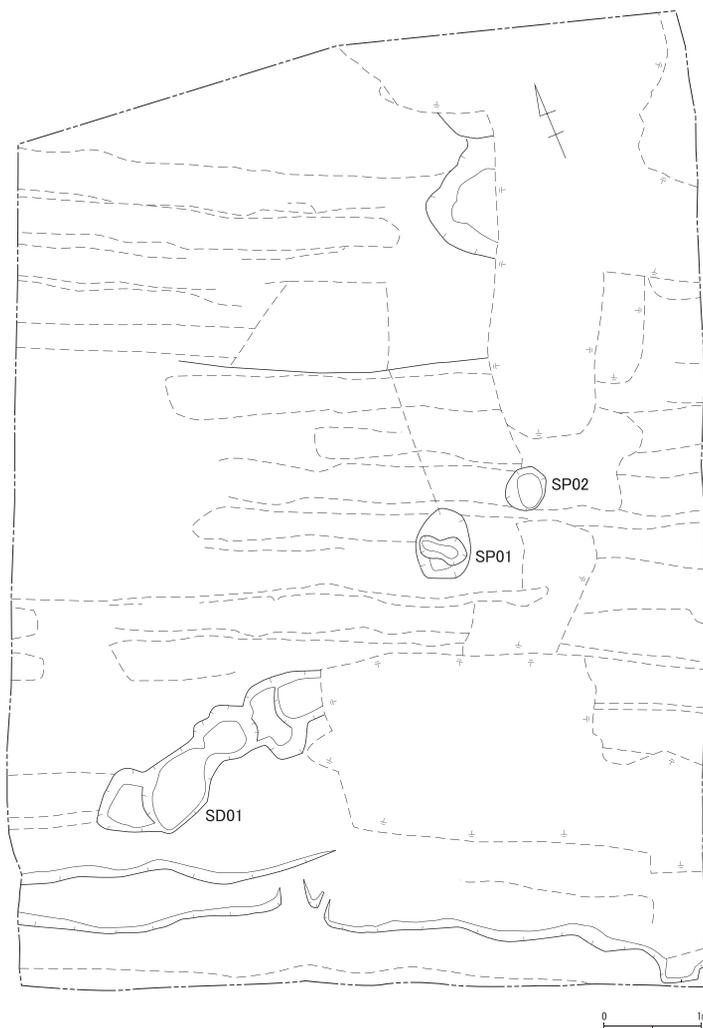
調査の結果、後世の攪乱や現代の畑の畝跡と思われる並行する溝状の攪乱が多数掘り込まれ、本来の遺構を残す遺構面はほとんど残っておらず、辛うじて溝状の遺構1条、ピット2基を確認したのみである。

(2) 遺構と遺物

検出遺構 (図版1・2、第4図)

遺構としては述べてきたように、溝1条とピット2基である。溝は調査区の南側で検出され、最大幅90cm、深さ40cmを測り、S字状に蛇行するが、両端が攪乱を受け、長さ2.7m程を検出したに過

ぎず、その形状、方向、性格等不明である。ピットは調査区中央で近接して検出したものである。SP01は楕円形に近い平面プランで2段に掘られており、径70cm、深さ40cmを測る。SP02は角張った円形のプランで、径50cm、深さ80cmを測りやや深めである。また、調査区全面に南東～北西方向に幅30cm程の畝状のものが検出されたが、攪乱と同様、弥生式土器の細片が出土したものの、時期の比定は難しく、周辺の様子や1次調査の時点での周辺土地利用状況をみると、現況では客土してあるものの、最近まで畑として利用されていた可能性があり、遺構としては取り上げなかった。いずれの遺構からも出土遺物は無く、表土剥ぎ中や攪乱穴から弥生式土器、土師器、陶磁器などの小片が出土したのみである。



第3図 第4次調査遺構配置図 (1/80)

出土遺物（図版5、第4図）

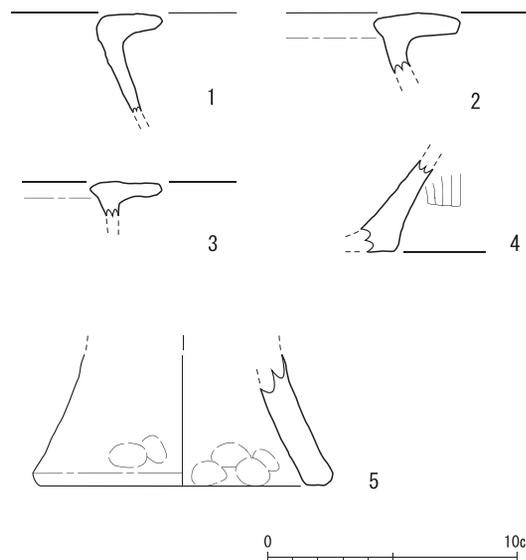
出土遺物は弥生土器の小片が大半で、須恵器・土師器や中世の黒色土器等が僅かながら出土しているが、いずれも細片で、ここでは、辛うじて図化できたものについて記述する。

弥生土器

甕（1～4）1～3は甕の口縁部片である。1は逆L字形の口縁部で、平坦面はほぼ水平である。器壁は荒れて不明確だが、口頸部内面は僅かに尖り気味である。内面にハケ痕が残る他、調整は不明である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。2は口縁部の上面が膨らみ、中央部が頂点となる。口縁部内側は強く撫でて内側へ引き出す結果、嘴状に尖る。

口縁内外はヨコナデ、頸部内面にナデが認められる。胎土に白砂粒を含むが、精良である。赤褐色を呈し、焼成は良好である。3は口縁部のみの資料である。L字状の口縁は内面がやや尖り、外方へ薄く引き出していて、波打っている。胎土に砂粒は少なく精良である。橙色で焼成はやや軟質である。4は底部の破片資料である。平坦な底部外面は中央に向かって若干膨らみ気味になり、繊維状の圧痕を残す。内外とも器壁が荒れて調整は不明だが、体部外面にハケ目の痕跡が観察される。胎土は精良で、赤橙色を呈する。

器台（5）5は器台の脚裾片と思われる。脚裾端は外方へやや膨らみ丸みを持ちながら中位に稜線状を作り出す。内外とも指頭痕が多くみられるが、内面は一部ナデによる調整を行う。橙色で内面は赤味が強い。胎土に砂粒は少なく、焼成は良好である。復元脚裾径12cmを測る。



第4図 第4次調査出土遺物実測図

3. まとめ

松葉園遺跡ではこれまで3次にわたる発掘調査が行われてきた。第1次調査についてはすでに報告書が刊行されており⁽¹⁾ 本遺跡認識の端緒になった古墳時代の石棺墓をはじめ、弥生時代の竪穴住居址1、石棺墓3、弥生時代の祭祀土坑1、南北に流れる溝1等々を検出している。住居址は径8m前後の円形プランに復元でき、中期後半に比定される。また、石棺墓は墓坑の掘り方のみであり、出土土器もないので時期は不明だが、1号石棺墓から出土した鉄器の形態から古墳時代のものとされる。さらに、祭祀土坑は8.25×5.25mの不整形プランであり、多くの祭祀土器を含む弥生時代中期後半の土器群が出土したが、祭祀土器の中に筒形器台が見られないのが注意される。ところで、遺構として明確にし得てないが、一面に指頭痕、もう一面に藁などの草茎圧痕が残る焼土塊を多数採取した。これらは、土器焼成に伴う穴窯の周囲を被覆した壁土が焼き固まったと考えられるものである。焼土塊はさまざまな遺構から出土しているが、破裂痕のある土器片が出土するなど、弥生

時代中期の土器焼成遺構があったものと推定されている。なお、1次調査では旧石器時代から縄文時代にかけての石器類が多く出土しており、この時期の資料は市内でも希少であり、当該遺物の分布を知る上で貴重な資料となっている。

一方、第2・3次調査では、1次調査の南隣及び東隣で実施され、竪穴住居跡、溝、木棺墓、などが検出され、竪穴住居や土坑は弥生時代のもが多かったが、加えて輸入陶磁器を副葬した木棺墓が見つかり、本遺跡の時代の幅が更に広がった。

今回調査した第4次調査地点は松葉園遺跡の範囲の内、北端中央付近に位置し、第3次調査地点に少し距離を置いた東側で実施したものである。調査面積も狭小で、全体が攪乱された状況であったが、周辺より地形的に一段高く、確実な遺構面は把握できたので、遺跡の一部を成すことは確実であると考えられる。遺構としては溝やピット2基と少なく、詳細な内容は明らかにできなかったが、前3回の調査で確認された遺構群の広がり把握できたことは遺跡範囲の確認と、今後の調査方針を立計するうえでも一つの成果を得られたものと考えられる。

(1)「松葉園遺跡Ⅰ」大野城市文化財調査報告書第59集 大野城市教育委員会 2003



調査風景

IV. 石勺遺跡 P 地点調査

1. はじめに

石勺遺跡は大野城市曙町2丁目・瓦田5丁目一帯に広がる遺跡で弥生時代中期の集落・甕棺墓地を中心とした、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。1988年に第1回目の調査としてA地点が発掘調査されて以降、A～O地点まで15回に及ぶ調査がなされてきた。それぞれの調査はアルファベットの地点名で表記されてきており、今回の調査はP地点、16回目の調査ということになる。対象地は、大野城市瓦田5丁目92番1である。平成30年に当該地に戸建て住宅を建てるべく、埋蔵文化財の有無の確認が事業者からなされたが、当該地は周知の包蔵地内であり、同年10月3日に実施した試掘調査では現地表下70cmで遺構が確認されていた。令和2年8月31日付で発掘の届出が県教育委員会あてに提出され、工事の概要によると、造成、基礎工事等により埋蔵文化財が破壊されることが確実であるため、文化財の記録作成のための発掘調査を実施するよう令和2年9月11日付で県教育委員会から通知がなされた。これを受けて大野城市教育委員会が調査主体となり、国・県の補助を受け、令和2年9月28日から同年11月6日まで現場での発掘調査を実施した。調査面積は約90㎡である。



第5図 石勺遺跡P地点調査地位置図 (1/5000)

2. 調査の成果

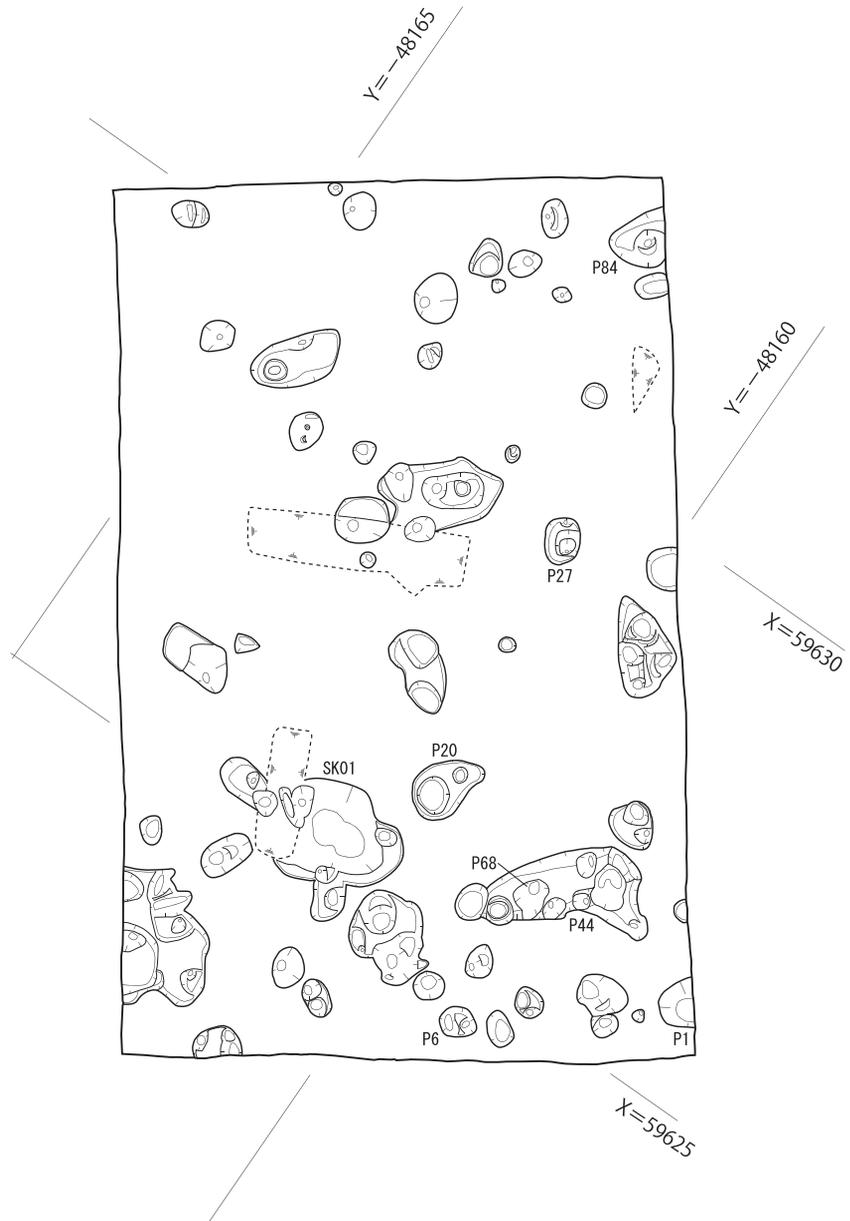
(1) 調査の概要

石勺遺跡は牛頸川の左岸の微高地に立地し、御笠川と合流するやや上流の現市役所周辺に広がる遺跡群である。弥生時代、古墳時代が遺跡の主体で、弥生時代では遺跡の東側に集落、西側に墓地が営まれ、古墳時代には遺跡のほぼ中央部で、大きな池状の遺構とそれを囲むように滑石製品の製造工房と思われる住居址群が見つかっている。

今回のP地点の調査は遺跡の北東部で実施したが、対象面積が狭く、半分ずつ反転してという表土剥ぎができなかったため、一度に表土剥ぎし、一旦場外へ持ち出し、仮置きしておいて調査終了後に戻すという手法をとった。

調査は9月28日から表土剥ぎを開始し、若干時間がかかったが、10月5日には作業員を投入し、遺構検出及びピットなどの小さな遺構の掘削を開始した。遺構検出面は黄褐色の粘質土で遺構の検出は比較的容易であった。遺構の検出と掘削がある程度進んだところから平面図の作成を並行して進めていたが、10月14日に遺構を完掘したところで全景の写真撮影を行った。翌15日に遺構図を完成させ、発掘機材の撤収を行いあらかたの作業は終了したが、座標測量や重機の作業日程の調整等時間を要し、11月2日から埋戻しを開始して同月6日に埋戻しを完了し、すべての作業を終えた。

調査の結果、土坑1基、性格不明な土坑状遺構3基、ピット多数を検出した。ピットはほとんど



第6図 P地点遺構配置図 (1/80)

が円形のプランを呈するもので、多くから弥生式土器の細片が出土したが、建物等として纏まるものは確認できなかった。

(2) 遺構と遺物

①土坑

SK01 (図版3、第7図)

調査区の南西部で検出したもので、攪乱や周囲に掘り込まれたピットにより不鮮明であるが、本来は隅丸方形のプランを呈すると思われる。幅約90cm、深さ30cm程を残す。断面は椀形を呈するが、性格等は不明である。

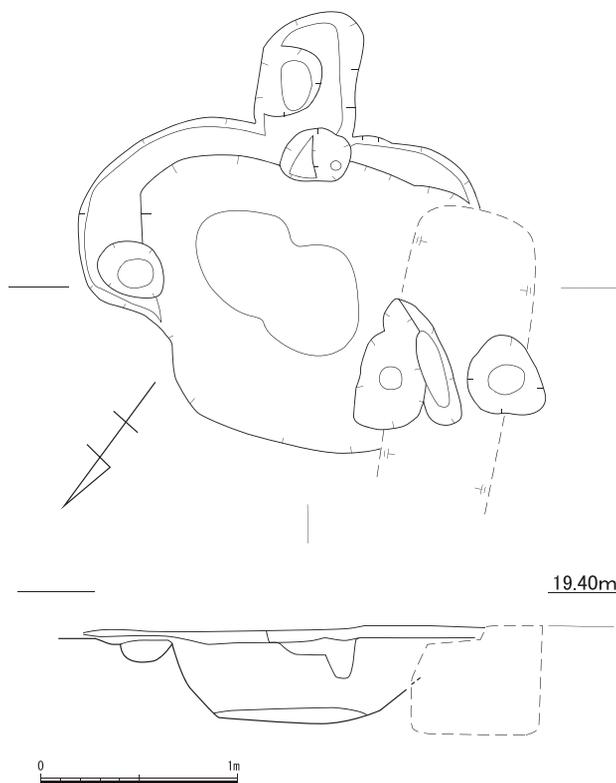
出土遺物 (図版5、第8図)

弥生式土器

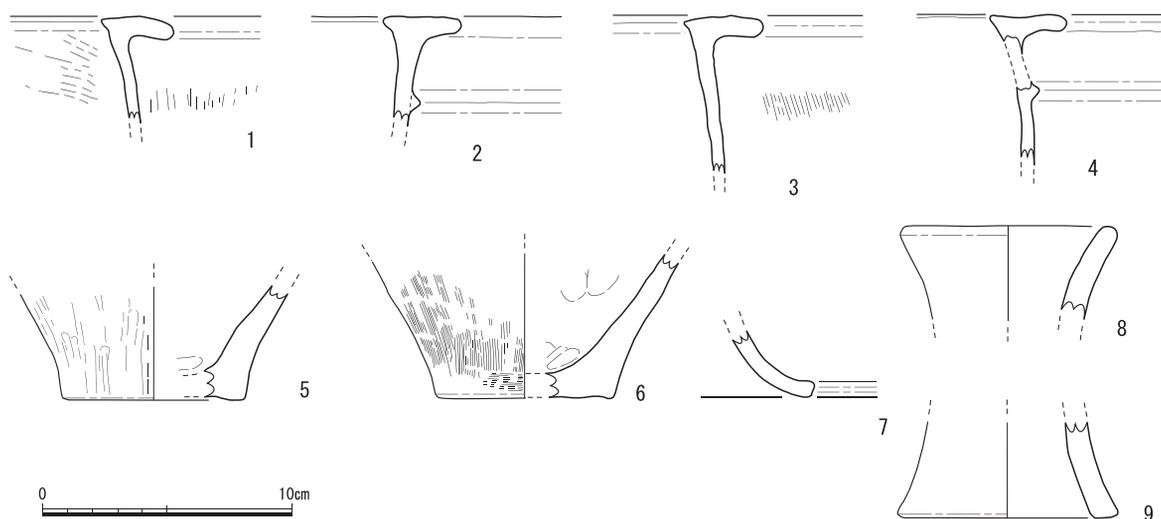
甕 (1~6) 1~4は小型甕の口縁部の断片資料で、いずれも逆L字の形態を示す。1は口縁端が丸く下がり、内面は嘴状に突き出す。2は口縁下に小さな断面三角形の凸帯が廻る。口縁上端は水平面をなし、内面に嘴状に突き出す。3は口縁上面が水平に近いが、内面側を撫でて窪ませる。4は直接接合しないが、胎土、色調が同一であり、図上復元をした。口縁円部は薄く湾曲して外方へ引き出される。5・6は底部の資料である。底部外面は平坦だが、5は若干窪む。

高杯 (7) 脚裾細片資料である。裾は外側に跳ね、端部は面を成すが、中央を窪ませる。

器台 (8・9) 8は端部が丸く仕上げられる。9は脚裾で端部は平坦となる。両者別個体である。



第7図 SK01実測図 (1/40)



第8図 SK01出土遺物実測図

②ピット

調査区では多数のピットを検出した。プランの形状は丸に近いものも多いが、不整のものがほとんどである。調査区全体で見ると南半の方が北半に比べ遺構密度が高い。ピットは大きいものが径40～50cm、小さいもので20cm前後で、深さは20cm程の浅いものが多い。ほとんどのピットからは弥生式土器の細片が出土したが、建物等になるようなピットの並び等は見出せなかった。

出土遺物（図版5・6、第9図）

弥生式土器

壺（10） 広口の壺の口縁部端の小片である。端部は平坦で、中央を

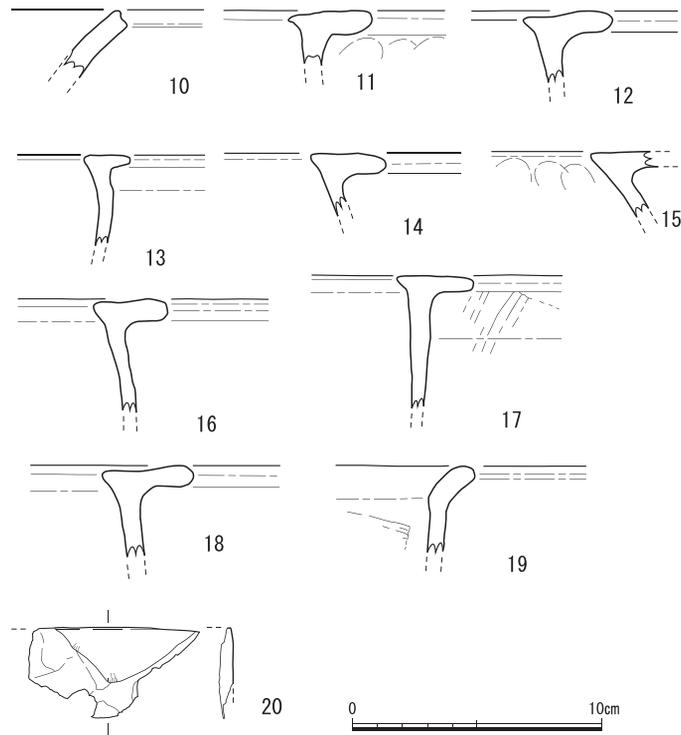
窪ませる。胎土は精良で、焼成良好。器台の脚裾とも考えられるが、内外とも丹塗りが施されるため壺の口縁部とした。

甕（11～18） 11はL字状の口縁部で、内面を鋭く嘴状に尖らす。口縁上面は平坦に仕上げられるが、中央がやや膨らむ形態である。12は上面は口縁内面を強くヨコナデしており、口縁全体は、ゆるくS字状に湾曲する。13は小型で短い口縁部が付く。口縁部下の胴部残存部はゆるく内湾しており、鉢形を呈するかもしれない。14はL字状の口縁であるが、端部は外方へ下がり気味となる。口縁部上面にはハケ状のヨコナデした痕跡がある。15は口縁部内面が鈍い突起となり、くの字状の形態を示す。口縁上面は平坦に延びるが、端部を欠損する。胎土に砂粒は少なく、焼成は堅緻に仕上がる。16もL字状の口縁であるが、内面は撫でて嘴状の突起を無くしている。口縁上面は内側を強くヨコナデするため窪んで凹面を成す。内外に丹を塗布した痕跡がある。17は口縁部上面がほぼ水平となるもので、口縁下の体部残存部は直線的に下がる。胎土に砂粒は少なく、焼成は灰色を呈するほど焼き締まっている。18はL字状の口縁で、端部を肥厚させて外方へやや上向きに引き出す。内面の嘴状の突起はヨコナデされて鈍い。10・16・19はP44、11・13はP1、12・15はP6、14はP20、17はP27、18はP84、20はP68からそれぞれ出土した。

鉢（19） 短い口縁部が小さく外反する形態のもので、端部は丸く仕上げる。口縁に続く体部は残りが僅かであるが、内湾気味に下る。内面口頸部以下に横方向のハケ目を施す。

石器

石包丁（20） 背部を直線的に研磨するもので、背部と身部の研磨面の一部を残す。穿孔は確認できない。石材は頁岩系と思われる。



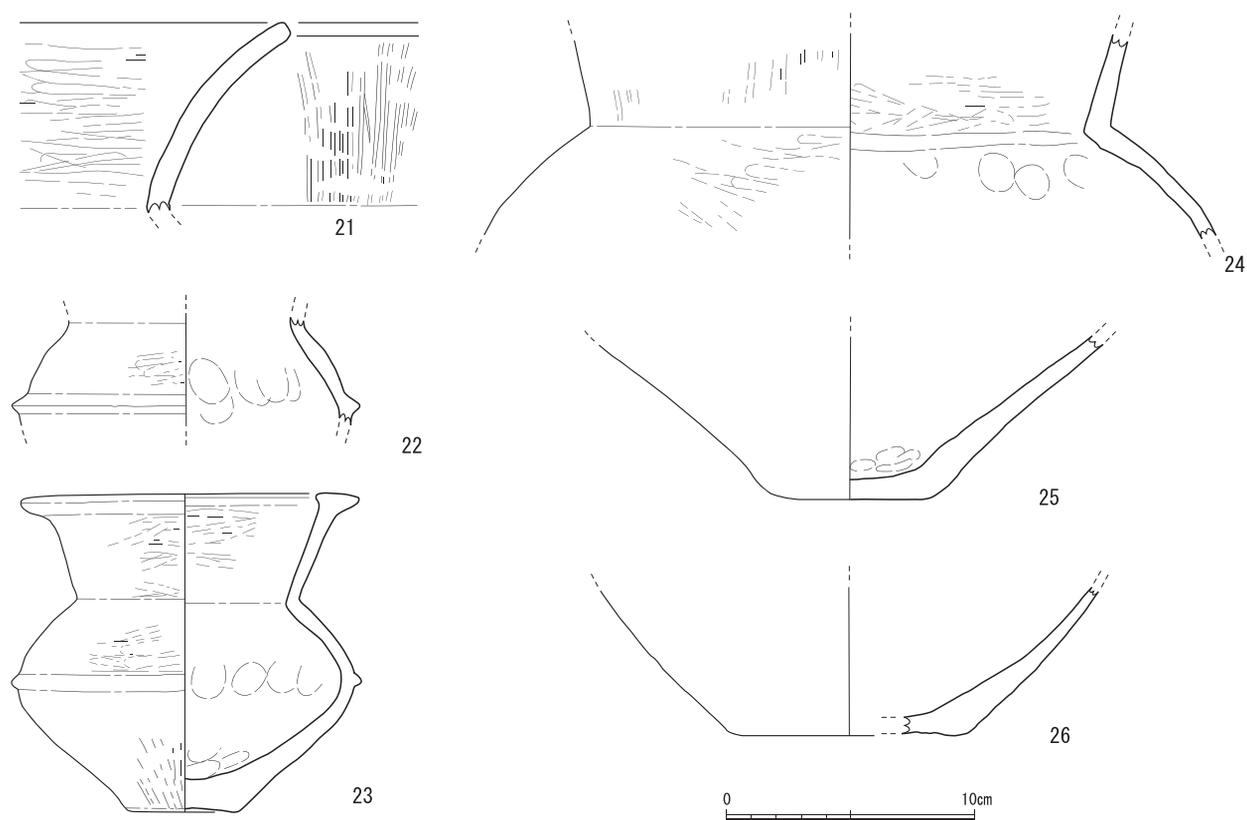
第9図 ピット群出土遺物実測図

③包含層出土遺物（図版6、第10・11図）

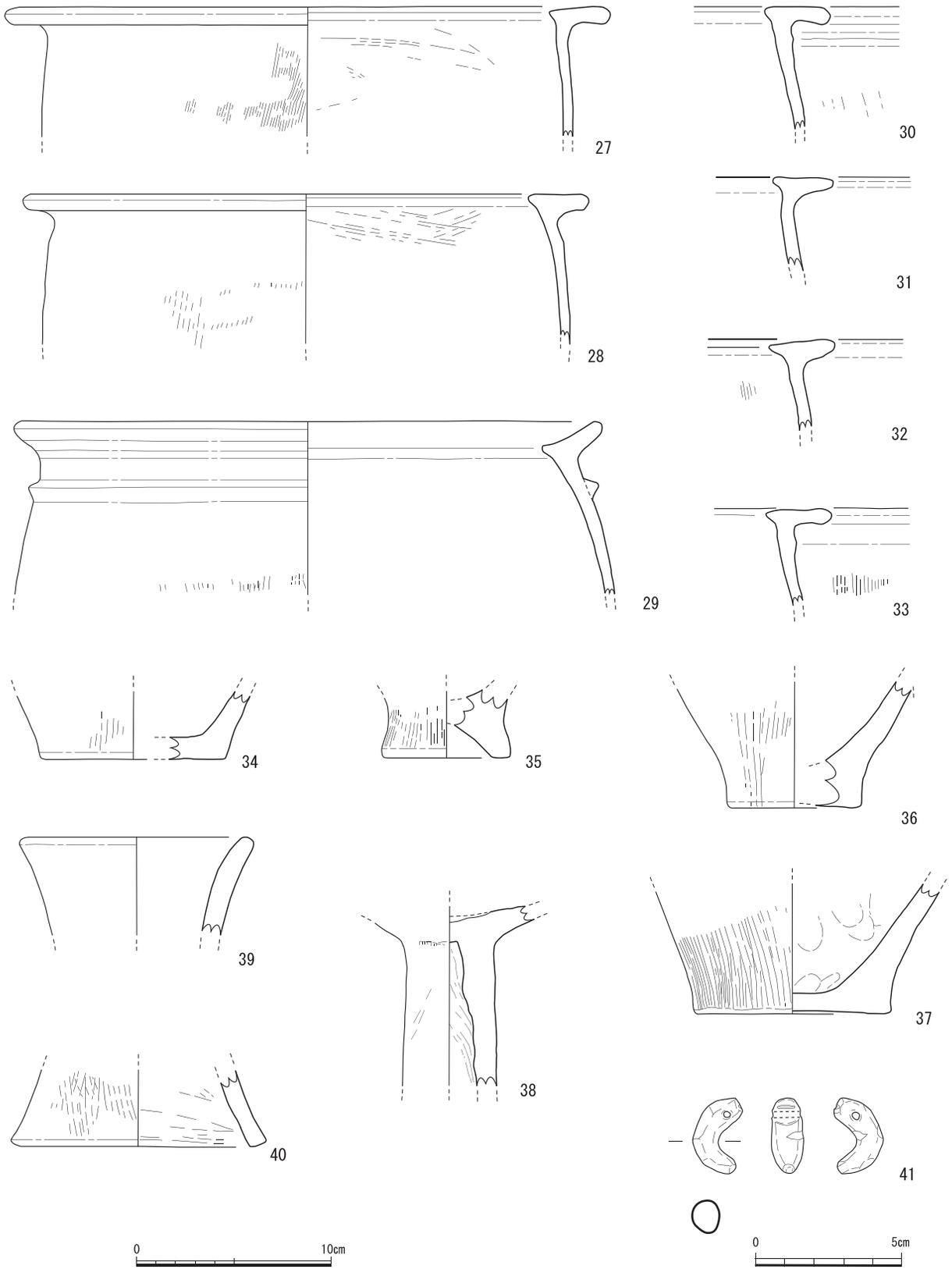
本調査地では客土約60cmを除去すると、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土が現れ、弥生式土器を含む約40～50cmの包含層を成していた。特に遺構検出面の覆土となる暗褐色砂質土からは完形の小壺を含む多量の弥生式土器が出土した。以下図化できたものについて記述する。

弥生式土器

壺（21～26）21は大きく外反する口縁部片である。端部は丸く収める。外面に縦方向の暗文が施され、内面は横方向に研磨される。内外とも赤色顔料が塗布される。22は小型の壺片で、23と同形態を成すものと思われる。胴部中位の突帯から頸部までの破片資料である。突帯は小さく断面三角形を呈すが、頂部は不揃いである。外面は研磨され、内面は撫でられるが指頭痕の凹凸が著しい。23は口縁のごく一部を欠くが完形品である。そろばん玉様の体部に直線的に外方へ開く口頸部で、小さなL字状を呈す口縁部に至る。口縁部上面はヨコナデにより平坦に仕上げられるが内面の突起を小さく上方へ引き出す。胴部中位に断面三角形の小さな突帯を貼り付けるが、頂部は丸まり、不整に廻る。底部は小さく窄まるが、若干窪み気味の平底をなす。外面は全体に器壁が荒れているが研磨され、頸部には縦方向の暗文が残る。内面はナデによる仕上げがされるが、胴部下半は指頭痕の凹凸がある。外面に赤色顔料の付着があるが、黒塗りの形跡がある。器高12.7cm、口径13.6cm、胴部最大径14.1cmをそれぞれ測る。24は口頸部の破片資料である。頸部復元径21cmを測る。口縁部はやや内湾気味に直立するが、端部を欠く。内面頸部は指頭痕の凹凸が認められるが、口縁部と胴



第10図 包含層出土遺物実測図①



第11图 包含層出土遺物実測図②

部の境はヘラ状の工具で面取りがされ、稜を形成する。調整は内外ともナデ調整を主とする。胎土に白砂粒を含むが、精良で焼成は堅緻である。25・26は底部の破片資料である。25はやや丸みのある平底で、大きく広がる胴部へ至る。底部内面に指による押さえ痕が顕著で、平らな底部を押し出したものと思われ、外面の底部と胴部の境が丸みを持つ。内面の調整はナデ、外面は器壁が荒れて不明確だが、ハケ目が部分的に残る。26は内湾気味の胴部に平底が付く形態のものであるが、底部外面は剥離が著しく荒れている。

甕 (27～37) 27は口縁部の1/6程を残す破片資料である。L字状の口縁部で、口縁端部は膨らませ、ほぼ水平に引き出す。内面の突起はヨコナデされ鈍くなっている。胴部の残存は僅かだが、やや膨らみながら直線的に下がる。器壁は荒れて調整は不明だが、外面にハケ目の痕跡が残る。28は口縁基部が太く、断面は三角形に近い形態である。体部はやや膨らみながら下降するが、口縁下で僅かに屈曲する。口縁部はヨコナデ、体部内面上位にはハケ様のヨコ方向のナデ、外面は丁寧なナデが施される。口縁端外面に煤の付着が認められる。29はくの字の口縁部と若干の胴部を1/2程残す資料である。口縁部は内湾気味に上方に引き上げられ、端部は丸く仕上げられる。口縁直下にやや幅広で断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯より下部の胴部は膨らみを持つ形態である。外面は胴部下位にハケ目を残すが、他はヨコナデにより、また、内面は突帯貼り付け部以上はヨコナデ、以下はナデにより仕上げられる。30はL字形を呈する口縁部で、それに連なる胴部は直線的である。口縁部は上面を平らにし、端部はやや膨らませて若干下垂させる。外面の器壁は荒れていて調整は不明だが、口縁部はヨコナデ、内面はナデにより調整される。31はL字状の口縁片である。口縁部上面はヨコナデにより水平に成形され、端部は薄めに横方向に引き出される。内面の嘴状の突き出しは基部内面を強くヨコナデして大きめに突き出し、そのために口縁下が若干屈曲する。口縁部下内面は斜め方向のナデ、外面はハケ目が残る。32は口縁部内面の突き出しがやや大きく引き出される。外方向への引き出しは肉厚で短い。口縁部の調整はヨコナデで、特に内面突出し下部は強くヨコナデされる。外面は器壁が荒れて調整不明。33はL字状口縁の断片資料である。口縁上面は水平に引き出されるが、中央を強く抑えるため端部が丸く膨らむ形態を示す。口縁部と胴部の接合部を強くヨコナデするため、外面の口縁直下に小さな膨らみを生じている。内面の嘴状の突起は端部がヨコナデされて、鈍く丸まっている。器壁は荒れていて調整は不明確だが、外面に細かいハケ目が部分的に認められる。34～37は底部の破片資料である。34は平底の小片資料。胴部と底部の境部分で稜が明確である。外面にハケ調整痕が認められる。35は台状の小片。甕底から短く外方へ開く脚状の台である。台裾は踏ん張る形で、端部は平坦に仕上げられ、座り良くしている。内面は弧状に抉れている。外面はハケ、内面はナデによる仕上げである。二次被熱を受けている。36は中央が若干窪む平底の底部片である。底部境から直線的に立ち上がり、そこから広がっていく胴部を成すため、底部は肉厚となる。外面にハケ調整の痕跡が残る。外面は赤変して二次被熱を受けたものと思われる。37は底部全形が残る資料で中央が僅かに窪む平底を呈す。底部境から直線的に外上方へ延びる体部が僅かに残存している。底部外面は雑に撫でているが、種々の圧痕が残る。体部外面はハケ目が顕著に残る。内面は底部に指押さえの痕跡があり、その上を横方向に丁寧に撫でている。また、底部から3cm上位では縦方向に指で撫で上げて成形した痕跡が残り、その上からナデ調

整される。

高杯（38）脚と杯の接合部の断片資料である。脚はやや中膨らみの脚柱部を残す。縦斜め方向の絞り痕が認められるが器壁が荒れて調整は不明である。脚柱内面にも絞り痕が認められる。杯部は丸みのある底部を残すのみで、全様は知れない。内外とも器壁が荒れ調整不明である。

器台（39・40）39は器台の上辺部、40は器台の脚裾部のそれぞれ断片資料で、同一の器体ではない。39は端部を僅かに外反させ丸く仕上げている。器壁が荒れて調整は不明である。40は裾端部を平坦に仕上げ、座り良くしている。裾内面はヨコナデされ、小さな凹面を作り出す。破片の上位は縦方向のナデが施されている。外面はハケ目調整される。

土製品

勾玉（41）完形品で全長2.55cmを測る。穿孔は焼成前に一方向から行われる。頂部に横方向の沈線を入れ、丁字頭勾玉を模倣したものと思われる。

3. まとめ

石勺遺跡では、これまで10地点で調査が行われ、縄文時代から中世にかけて遺構・遺物が検出されている。遺跡の主体は弥生時代中期から古墳時代中期と考えられるが、時期によって、その遺構のあり方に偏りがあるようである。詳細には未調査箇所も含め、遺構それぞれのあり方の検討が必要であるが、A・B・C・O・E・N地点といった遺跡の北東部先端にあたる場所ではほぼ弥生中期を主体とした遺構・遺物が検出されている。C地点の調査では、傍を流れる牛頸川の氾濫による砂層の堆積が認められ、遺跡の東端と位置図けられた。また、G・H・I・J地点といった遺跡の中央から北西部にかけても弥生時代が主流であり、特にH・J・I地点では遺跡の中央の比較的高所で甕棺墓や石棺墓等弥生期の墳墓が営まれる。一方、K・D・M地点など、牛頸川に沿った遺跡の南辺の調査区では、弥生時代終末から古墳時代の前期さらには古墳時代中期に及ぶ遺構が主に検出されている。特にK地点では弥生時代から古墳時代に移行する時期の拠点的な集落を形成していたと思われ、その以後古墳時代の中期にはD地点で拠点的な生産遺跡が営まれる。

今回調査したP地点はA・E・N地点に囲まれた箇所、検出した遺構はピット群と不整の土坑状の遺構のみであったが、出土した土器からほとんどが弥生時代中期に属する遺構である。丹塗りの祭祀土器が比較的多く出土しており、一帯で何某かの祭祀的な行為を行う集団の活動があったには違いないが、それ以上は不明と言わざるを得ない。また、本調査では、弥生式土器を大量に含んだ包含層がかなり厚く堆積していた。遺構からの出土量を大きく上回り、それぞれの破片も大きく、試掘の際ではあるが小型の壺がほぼ完形で出土している。このような状況はA・E・Nなどの地点でも同様に確認されている。一方、これらの地点から西へ100m程のB地点では包含層が確認されおらず、時期や目的は不明だが、一帯の地形の改変が行われたことを窺わせる。

いずれにしても今回の調査において石勺遺跡の弥生時代の遺構の広がりを考える上で、補填的な資料を得ることができたといえよう。

表1 松葉園4次出土遺物観察表

図番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	弥生土器	甕	表土剥ぎ	② (4.9)	内外面ナデ	A:微細～4mm程の白色砂粒・長石を含む B:やや粗い C:内外2.5YR5/8 明赤褐色	
2	弥生土器	甕	表土剥ぎ	② (1.35)	内外面ナデ?	A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内外5YR6/8 橙色	
3	弥生土器	甕	表土剥ぎ	② (2.3)	内外面調整不明	A:1～3mm程の長石を含む B:やや粗い C:内外2.5YR5/8 明赤褐色	
4	弥生土器	甕	表土剥ぎ	② (3.6)	外面上位ハケメ 外面下位調整不明 内面ナデ	A:1～3mm程の長石を含む B:良好 C:内外2.5YR6/8 橙色	
5	弥生土器	器台	表土剥ぎ	② (5.2) ③ (12.0)	内外面ナデ 脚裾部内外面指オサエ	A:1～4.5mm程の長石を含む B:良好 C:内外5YR5/8 明赤褐色	

表2 石勺遺跡P地点出土遺物観察表

図番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	弥生土器	甕	SK01	② (4.2)	口縁部上面ヨコナデ 体部内外面ハケ目	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい橙色	
2	弥生土器	甕	SK01	② (4.3)	内外面ヨコナデ	A:4mm程の白色砂粒・長石・石英・雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/8 橙色	
3	弥生土器	甕	SK01	② (6.3)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面ハケ目 体部内面調整不明	A:4mm程の砂粒・長石・角閃石・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR6/1 褐色 外10YR7/4にぶい黄褐色	
4	弥生土器	甕	SK01	図上復元② (5.85)	口縁部内面～体部外面ヨコナデ 体部内面ナデ	A:微細～2mm程の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/3 にぶい橙色～7.5YR4/1褐色	
5	弥生土器	甕	SK01	② (4.5) ③ (7.3)	外面ミガキ 内面ナデ一部指オサエ	A:微細な白色砂粒・石英・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR4/1 褐色 外7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR5/2 灰褐色	内面煤付着
6	弥生土器	甕	SK01	② (5.7) ③7.1	外面ハケ目 内面ナデ一部指オサエ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/3 にぶい橙色 外5YR6/8 橙色～5YR5/1 褐色	
7	弥生土器	高杯	SK01	② (2.6)	内外面調整不明	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色	
8	弥生土器	器台	SK01	② (3.7) 上端径 (8.7)	外面ナデ 内面ヨコナデ	A:微細～2mm程の白色砂粒・長石・角閃石・雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/8 褐色	
9	弥生土器	器台	SK01	② (3.8) ③ (8.8)	内外面調整不明	A:2mm程の長石・白色砂粒を含む B:やや良好 C:内外7.5YR8/4 浅黄褐色～5YR7/6 褐色	
10	弥生土器	壺	P-44	② (2.7)	内外面ヨコナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外5YR7/4 にぶい橙色～5YR4/8 赤褐色	内外面丹塗り
11	弥生土器	甕	P-1	② (2.2)	内外面ヨコナデ 体部外面指オサエ	A:微細な白色砂粒・長石・石英・角閃石・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR4/1 褐色	内外面煤付着
12	弥生土器	甕	P-6	② (2.8)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面調整不明 体部内面ヨコナデ	A:4mmの砂粒・微細な白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内外5YR7/6 褐色～7.5YR8/4 浅黄褐色	
13	弥生土器	甕	P-1	② (3.6)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面調整不明 体部内面ナデ	A:微細な白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい橙色	
14	弥生土器	甕	P-20	② (2.5)	口縁部上面ヨコナデ後ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヨコナデ	A:微細～2mmの白色砂粒・長石・石英・雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/6 褐色	
15	弥生土器	甕	P-6	② (2.6)	口縁部上面ヨコナデ後ナデ 体部内外面ヨコナデ 体部内面指オサエ	A:微細～2mmの白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外5YR7/6 褐色～7.5YR7/3 にぶい褐色	
16	弥生土器	甕	P-44	② (4.5)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面調整不明 体部内面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR5/6 明赤褐色 外7.5YR7/6 褐色	口縁部端部煤付着 内外面一部丹塗りの痕跡
17	弥生土器	甕	P-27	② (5.3)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面ハケ目の痕跡 体部内面ナデ	A:微細～2mmの白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外10YR7/3 にぶい黄褐色	
18	弥生土器	甕	P-84	② (3.6)	口縁部内面～体部外面ヨコナデ 体部内面ナデ	A:微細～3mmの白色砂粒・雲母を多量に含む B:良好 C:内外2.5YR6/8 褐色～2.5YR5/1 赤灰色	

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
19	弥生土器	鉢	P-44	② (3.4)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面ナデ 体部内面ハケ目の痕跡	A:微細～3mmの白色砂粒・長石・石英・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい橙色	
20	石製品	石包丁	P-68	最大長3.6 最大幅6.85 厚さ0.6 重さ12.5g	頁岩系		
21	弥生土器	壺	包含層	② (7.6)	外面暗文 内面ミガキ	A:微細～2mm程の白色砂粒・角閃石・雲母を含む B:良好 C:内2.5YR4/8 赤褐色 外2.5YR5/6 明赤褐色～7.5YR7/6にぶい橙色	内外面丹塗り
22	弥生土器	壺	包含層	② (4.5) ④ (14.0) 頸部径 (9.4)	外面ミガキ 内面ナデ一部指オサエ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR6/6 橙色 外5YR7/6 橙色	
23	弥生土器	壺	包含層	①13.6 ②12.7 ④14.1 頸部径9.0	頸部内面～胴部外面中位ミガキ 胴部外面下位ハケ目 底部内面指オサエ 胴部内面ナデ一部指オサエ	A:微細～4mm程の白色砂粒・長石・石英・雲母を含む B:良好 C:内5YR5/4 にぶい赤褐色 外5YR6/3 にぶい橙色～5YR4/8 赤褐色・5YR3/1 黒褐色	完形 外面黒塗りあり
24	弥生土器	壺	包含層	② (7.9) 頸部径21.0	頸部外面暗文の痕跡あり 頸部内面ミガキ 体部外面ミガキ 体部内面ナデ一部指オサエ	A:3mm程の白色砂粒・長石・角閃石・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR5/4 にぶい褐色 外5YR6/6 橙色	No25と同一個 体の可能性あり
25	弥生土器	壺	包含層	② (6.5) ③6.4	内外面ナデ 底部内面指オサエ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内5YR5/3 にぶい赤褐色 外5YR4/6 赤褐色	
26	弥生土器	壺	包含層	② (5.9) ③9.5	外面調整不明 内面ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内5YR6/6 にぶい橙色 外10YR7/4 にぶい橙色～10YR7/3 にぶい黄褐色	
27	弥生土器	甕	包含層	① (31.0) ② (6.6)	口縁部上面ヨコナデ 体部内外面ハケ目	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:7.5YR7/6 橙色 外5YR6/5 橙色	
28	弥生土器	甕	包含層	① (29.0) ② (7.6)	口縁部上面ヨコナデ 口縁部内面・体部外面下位ハケ目 体部内面ナデ	A:微細～3mm程の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内5YR5/8 明赤褐色 外2.5YR5/6 明赤褐色～2.5YR3/1 暗赤灰色	口縁部端部煤 付着
29	弥生土器	甕	包含層	①40.2 ② (11.7)	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケ目の痕跡あり 体部内面ナデ	A:微細～3mm程の砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にぶい橙色 外7.5YR4/1 褐灰色	
30	弥生土器	甕	包含層	② (6.2)	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケ目 口縁部上面・体部内面ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:7.5YR5/3 灰褐色 外7.5YR5/3 明褐色～7.5YR5/1 褐灰色	
31	弥生土器	甕	包含層	② (4.75)	口縁部上面ハケ目 体部内外面ヨコナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内5YR6/4 にぶい橙色 外7.5YR6/4 にぶい橙色	
32	弥生土器	甕	包含層	② (4.6)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面調整不明 体部内面ハケ目	A:微細～2mm程の白色砂粒・石英・雲母を含む B:良好 C:内5YR6/6 橙色 外5YR5/4 にぶい赤褐色	
33	弥生土器	甕	包含層	② (4.9)	口縁部上面ヨコナデ 体部外面ハケ目 体部内面ナデ	A:微細～2mm程の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR8/4 浅黄褐色	
34	弥生土器	甕	包含層	② (3.45) ③ (9.4)	体部外面ハケ目 他は調整不明	A:微細～2mm程の白色砂粒・4mm程の長石を含む B:良好 C:内5YR7/6 橙色 外7.5YR6/6 橙色	
35	弥生土器	甕	包含層	② (3.4) ③ (6.6)	底部外面ナデ 体部外面ハケ目 他は調整不明	A:微細～2mm程の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR5/2 灰褐色 外5YR5/6 明赤褐色	
36	弥生土器	甕	包含層	② (6.4) ③ (6.9)	体部外面ハケ目 他はナデ	A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR5/2 灰褐色 外2.5YR6/4 にぶい橙色	
37	弥生土器	甕	包含層	② (6.6) ③10.1	体部外面ハケ目 底部外面ナデ 体部内面ナデ・指オサエ	A:微細～2mm程の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内5YR6/6 橙色 外5YR8/2 灰白色～5YR7/6 橙色	
38	弥生土器	高杯	包含層	② (9.1) 頸部径4.6	脚部内面シボリ痕あり 他は調整不明	A:微細な白色砂粒・黒色粒・長石を含む B:良好 C:内5YR6/6 橙色 外5YR8/2 灰白色～5YR7/7 橙色	
39	弥生土器	器台	包含層	① (12.0) ② (5.0)	内外面調整不明	A:微細～2mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR6/4 にぶい橙色 外2.5YR6/6 橙色	
40	弥生土器	器台	包含層	② (3.9) 下端径 (13.05)	内外面ハケ目	A:微細～5mm程の砂粒を含む B:良好 C:内2.5YR6/8 橙色 外5YR6/4 にぶい橙色	
41	土製品	勾玉	カクラン	長さ2.55 幅1.7 厚さ1.1 重さ3.3g	全体ナデ成形	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:5YR5/6 明赤褐色	

图 版



松葉園第4次調査全景



松葉園第4次調査畝状跡



松葉園第4次（上：調査前 ・ 下：SD01）

松葉園第4次（上：SP01 ・ 下：SP02）



石勺P地点全景



石勺P地点SK01全景

図版4



石勺P地点
北東部ピット



石勺P地点
北西部ピット



石勺P地点
調査区南半



松-1



石-2



松-2



石-3



松-3



石-5



松-4



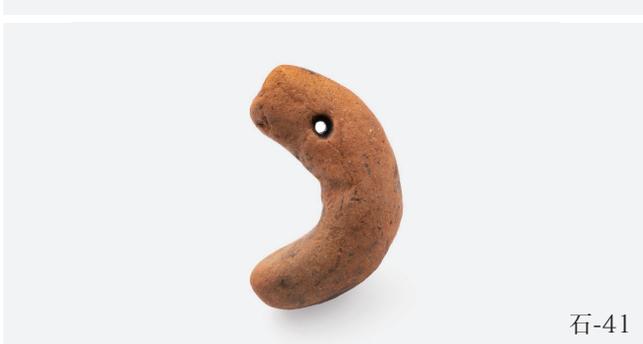
石-13



松-5



石-16



報告書抄録

ふりがな	まつばぞのいせき		こくじゃくいせき					
書名	松葉園遺跡 3		石勺遺跡 9					
副書名	第4次調査		P地点の調査					
巻次	3		9					
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	澤田 康夫							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 (092) 501-2211							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつばぞの 松葉園遺跡 第4次調査	福岡県大野城市乙金1丁目795-9			33° 32' 55"	130° 29' 30"	20120905 ～ 20121002	83㎡	個人住宅 建設
こくじゃく 石勺遺跡 P地点	福岡県大野城市瓦田5丁目92-1			33° 32' 12"	130° 28' 53"	20200928 ～ 20201106	90㎡	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松葉園遺跡 第4次調査	集落	旧石器～中世	溝、ピット	弥生式土器、 土師器、陶磁器				
石勺遺跡 P地点	集落	弥生時代	土坑、ピット	弥生式土器、 土師器				
要約	松葉園遺跡は乙金山の西麓に派生する低丘陵上に位置する。これまでの調査で、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が見つまっている。調査の結果、遺構面は新期の攪乱が著しく本来の地形は改変を受けていたが、溝1条、ピット2基を検出し、弥生時代の遺構が広がることを確認できた。			石勺遺跡は牛頸川が御笠川と合流する直前の牛頸川左岸の微高地上に営まれる遺跡である。本調査は遺跡の北東部で実施したが、個人住宅の建設に伴うもので、調査面積は狭小で顕著な遺構は検出できなかったが、過去の周辺の調査同様弥生時代の遺物が出土し、遺跡の広がりを確認することができた。				

松葉園遺跡3・石勺遺跡9

大野城市文化財調査報告書 第196集

令和4年3月31日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社

〒848-0035 伊万里市二里町大里乙3617-5